
メタルギアサイレン

M16A1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メタルギアサイレン

【Nコード】

N6806W

【作者名】

M16A1

【あらすじ】

1975年、ある任務のため日本の夜見島に向かっていたネイキッド・スネーク。しかし、彼はそこで異変に巻き込まれる。

すべての始まり（前書き）

初めて二次創作投稿します。

すべての始まり

1975年11月4日、日本領海上空を一機のヘリが飛行していた。ヘリにはヘリのパイロットと一人の男が乗っていた。男の名はネイクッド・スネーク。過去に全面核戦争の危機から世界を二度も救った伝説の英雄である。今彼はある任務を引き受けて、日本の夜見島という島に向かっていった。「しかしあの事件から丁度一年だな・・・」。

「無線の相手・カズヒラ・ミラー」がそういった。「ああ・・・」。

「スネークもそう答えながら窓の外を見下ろした。「しかし一年後の任務が日本だとはな・・・」カズがこうつぶやいたのでスネークは「なんだカズ、日本が恋しくなったのか。」とからかった。それを聞くと数は「そういうことじゃないが・・・」と慌てて言い返した。と、ヘリのパイロットが「もうすぐ目的地です。」と言ったので会話を中断し、着陸態勢に入った。その時、パイロットが「なんだこれは・・・」と驚愕に満ちた声で言ったので、スネークも窓の外を見た。すると、窓の外の海の水が、すべて真っ赤に染まっていた。と、その時、ヘリの中に警報音が流れた。「どうした。」

スネークはパイロットに問いかけた。「すべての操縦機器に異常発生。つ、墜落します。」パイロットが叫んだその直後、ヘリが急降下を始めた。「うおおおおおおおおおおおお。」スネークが絶叫した直後、ヘリは地上に叩きつけられ、スネークの意識が消散した。

すべての始まり（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

絶望のサイレンが鳴り響く。

ヘリが墜落してから数十分後、スネークは目を覚ました。ヘリの中はすさまじいことになっていた。スネークはヘリのパイロットの生死を確認したが、パイロットはすでに事切れていた。そしてスネークは散乱していた装備の中から使えそうな物を選び出した。幸い壊れていたのは支援補給マークと支援砲撃マーク、それにフルトン回収システムだけで、他は無傷だった。そしてスネークがヘリから脱出すると、無線がかかってきた。「スネーク、大丈夫か、いたい何が起こったんだ。」カズヒラが問いかけた。「ああ、俺は無事だ。しかし、パイロットが・・・死亡した。」スネークはそう答えた。「そうか・・・残念だ・・・。だが今は島から脱出することに専念するんだ。今救援をよこす。」とカズヒラ（以下カズ）がそう答えた。「だがフルトン回収システムが破損していて・・・。」スネークが返事をしたその時、スネークの頭上を弾丸が掠めた。慌ててスネークが伏せると、さっきまでスネークの胴体があった場所に弾丸が襲い掛かった。「どうした、なにがあつた。」カズが突然のことにあせりつつも、聞いてきた。「攻撃を受けている。このままでは殺られる。応戦する。」スネークはすぐに起き上がり全速力で走り敵の銃弾をよけつつそう言うと、M16A1の安全装置を外した。そして、敵の銃が弾切れになるのを待った。すぐに敵の銃は弾切れになり、敵はリロードしようとした。その隙を狙い、スネークはM16A1を構え、トリガーを引いた。銃声が響き、敵が胸に弾を喰らい倒れた。スネークは敵に銃を向けたまま近づいた。そして、敵の胸に銃傷がついているのを確認し、銃を下ろした。5.56ミリ弾を胸に受けて生きている物はいまい。スネークは敵の顔を見た。すると、何故か敵は目から血を流していた。次に敵の服装を確認したが、敵の服装は迷彩服にヘルメットといういでたちで、まるでどこかの兵士のようなだった。次にスネークは敵の持っていた

銃を拾い上げた。その銃は自衛隊で採用されている六四式小銃と呼ばれるものだった。スネークはさっそくカズに無線をかけた。「スネーク、大丈夫だったか。」カズはあせった様子で聞いてきた。「ああ、大丈夫だ。それより敵がもっていた銃は自衛隊で採用されている六四式小銃だった。いったいどういうことなんだ。まさか今回の任務には自衛隊もかわっているのか。」「分からない。それよりすぐにそこを離れるんだ。まだ敵が残っているかもしれない。」「わかった。」スネークは返事をする、六四式小銃と予備弾倉を回収し、その場を離れようとした。そのとき、突然サイレンが鳴り響いた。スネークが戸惑っていると、スネークに赤い大波が見えた。スネークはすぐに走り出したが、すぐに大波に巻き込まれた。

絶望のサイレンが鳴り響く。(後書き)

ご意見ご感想お待ちしております。

終了条件 民間人と合流

スネークは夢を見ていた。どこかに一人で立っている夢だ。と、その時、スネークは頭痛に襲われた。夢の中でだ。そして誰かが呼びかけている声も聞こえてきた。と、スネークは目を覚ました。そして、彼の前には二人組の男女が立っていた。スネークはとつさにMK22を取り出し、二人組みのほうへ向けた。「ま、待って、撃たないでください。」二人組みのうち男のほうがあわててそういった。「民間人？」スネークはそう呟いた。二人の格好は普通の格好で兵士などには見えなかったからだ。それでもスネークは気を緩めず、MK22を構えたまま、武器などを持っていないか確認したが、男は角材しか持つていなかった。一応角材を地面に置かせ、同行者らしき女性のほうも確認し、そちらも武器を持っていないことを確認すると、やっと銃を降ろした。「お前達は誰だ？」スネークは二人に聞いた。「僕は一樹守。アトランティスという雑誌の編集者です。で、この人は岸田百合さん。倒れていたのを助けてあげたんです。」スネークは一樹の話聞き終わった後、周囲の探索を始めた。奇跡的にスネークのM16A1と六四式小銃は近くに落ちていたので、すぐに回収した。「しかしここは暗いな。」スネークは周囲の様子を知るために懐中電灯を取り出し、スイッチを入れた。と、その時、岸田が光を嫌がるようなしぐさをした。スネークは怪訝に思っていると、一樹が「あの、岸田さんは光が嫌いなんで消してもらえないでしょうか。」とやってきたので、スネークは慌てて懐中電灯のスイッチを切った。すると一樹は「お手数かけてすいません。しかしあなたが親切な人でよかった。さっきの自衛隊の連中とは大違いだ。」といったので、スネークは「自衛隊？」と聞き返した。「ええ、さっき二人の自衛隊員に会ったんですよ。でその内の一人がすごく嫌なやつだったんですよ。ところであなたも自衛隊かなにかですか？」「いや、俺はMSF、

正式名称「国境なき軍隊」の総司令だ。」「国境なき軍隊？なんですかそれは。」「お前達には一生関係のない組織だ。」「とまで答えたところで無線がかかってきた。」「スネーク、怪我はないか？」「力ズが

話しかけてきた。」「ああ、どこにも問題はない。」「あんたには無事でいてもらわなきゃならない。なにしろMSFの総司令だからな。」「ところで今二人の民間人といえるんだがそいつらも自衛隊員に会ったと言っている。やはり今回の任務には自衛隊もかわっているのか？」「今全力で調査している。それとさっき救援部隊を夜見島に派遣した。一時間後には夜見島に到着する。あんたはそいつらと合流してくれ。

「民間人はどうする？」「これも何かの縁だ。いつしよに保護しよう。」「わかった。」「スネークは無線を切ると二人に向けて言った。」「二人は一度MSFで保護しよう。それから日本へ返してやる。」「あの、実は・・・」「どうした、なにか問題でもあるのか？」「スネークは聞き返すと、突然岸田が二人の話に割り込んできた。」「私のお母さんがこの島に閉じ込められているの。早く助けてあげないとだめなの。」「君の母親が？」「・・・ということで、お願いします。彼女の母親の搜索を手伝ってください。」「一樹がスネークに懇願した。」「悪いが搜索には付き合えない。日本に帰ってから警察にでも頼んで・・・」とスネークは拒否しようとした。その時、岸田がスネークに詰め寄ってきた。」「お願い、あなた達だけが頼りなの。」「・・・」「スネークはしばらく口を閉ざしていたが、やがてこう言った。」「しかたない、今回だけは協力しよう。」「ありがとうございます。ところであなたのお名前は？」「一樹がスネークに尋ねた。」「俺のことはスネークと呼んでくれ。」「スネークはそう言った。

終了条件 民間人と合流（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

終了条件 「冥府の門」へ到達

あれから、スネークたちは遊園地のようなところにいた。さきほど一樹に聞いた話によると、一樹たちも目から血を流した人間に襲われたらしい。

しかしそいつは自衛官ではなく一般人だったそうだ。そして話を戻すが、

そこはスネークが倒れていた場所でスネークが倒れていた場所の近くに岸田の母親がいるらしい。

「しかしこの広大なところをいちいち探すとなると時間がかかるぞ。」

「スネークがそういう

と、岸田は「冥府の門を開ければすぐ会えるわ。」と言ったので、スネークたちは冥府の門の鍵を開けるため、鍵を搜索していた。と、スネークたちの近くに自衛官がいた。その自衛官はスネークたちに背を向けていた。

「お前達はここでまっっている。」スネークはそういうと、MK22とスタンロッドを取り出して二人を

待たせると、右手にMK22、左手にスタンロッドを持って自衛官の背後から近づいた。そしてすかさず

クロス・クォーターズ・コンバット

CQCで自衛官を拘束した。そして、自衛官の喉下に

スタンロッドを突きつけ、尋ねた。

「なぜ俺を襲った。お前らの目的を言え。」しかし、自衛官はただ拘束から逃れようとしているだけで、スネークの質問には一切答えなかった。「もう一度だけ聞くぞ、お前らの目的を言え。」スネークは

さらにスタンロッドを深く突きたてたが、それでも自衛官は口を割らなかった。

しかたがないので、スネークはその自衛官を壁に投げ飛ばした。そして、自衛官が地面に落ちたところで

自衛官にスタンロッドを突き立てた。自衛官の体に高压電流が走り、自衛官は気絶した。

そして、スネークは自衛官が持っていた自動拳銃を回収した。しかしその拳銃は銃器に詳しいスネークでも見たこともないものだった。（これはたぶん自衛隊の試作拳銃だろう）スネークはそう結論づけると、

自衛官をボディチェックし、他に使えるものがないか調べた。すると、もう一挺拳銃が出てきたのでそれも回収し、予備弾倉も回収すると、その場をあとにした。そして拳銃の操作方法を確認し、一樹たちのところに戻った。そして一樹に「持ってる、護身用だ。」といて拳銃を一挺手渡した。それから全員で鍵のある場所へと向かった。

そして鍵のある場所に着いた。しかし、そこには特に鍵のようなものは見当たらなかった。

と、いきなり岸田が歌った。そして、岸田が歌い終わったあと、いきなりスネークは激しい頭痛に襲われた。痛みあまり目を閉じて頭をおさえていると、ふいに何かが見えた。しかしそれはスネークの視界ではないようだった。そして、そこには何かの図形が書かれた物体が見えた。と、頭痛が止んだので、スネークは目を開けた。と、スネークの目の前にはさきほどの物体があった。「これはなんだ。「スネークがつぶやくと、「これが鍵よ」と岸田がいった。「これが鍵か。で、どうやって開けるんだ？」スネークが聞くと、「これを歌のとおりに戻すと鍵が開くそうです」と一樹が答え、鍵を回し始めた。そして、一樹が鍵を回し終わった。

すると、鍵から赤黒い何かとともに波紋が出た。これで鍵が開いたらしい。そのあとも、スネークたちは次々に鍵を開けていき、ついに最後の鍵を開けた。すると、岸田がまた歌い始めた。

そして、岸田が歌い終わった。すると、スネークはまた頭痛に襲われた。すると、「目をあけて」と岸田の声がし、それとともに頭痛が止んだので、スネークは目を開けた。すると、岸田が「ねえ・・・

見て」と言って何かを指差していた。スネークがその方向を見ると、なんと、地面に大きな穴が開いていた。

終了条件 「冥府の門」へ到達（後書き）

ご意見感想お待ちしております。あと改行がところどころおかしいところもありますが、なぜか投稿時にこうなってしまうのでその辺はご容赦ください。

冥府 6:00:00

スネークたちは「冥府の門」の最下層へと降りていった。（いったいなんの目的でこんな場所が？）

スネークは疑問に思いつつ、岸田の母親を救出するためにひたすら階段を下りていった。

そして、ついに最下層と思われる場所に到達した。と、そうしたら、岸田が何を思ったのか、「ねえ、

私を見て。」などと言いながら、いきなり服を脱ぎ始めた。「おい、そんなことしてる場合じゃ・・・」

スネークはそういいかけたが、そうこうしているうちに岸田は服をすべて脱ぎ終えた。そして次の瞬間、

スネークは自分の目を疑った。なんと、岸田の腹には・・・「顔」が付いていたのだ。

「ねえ、私を見て。」岸田はなおも言い続けていた。そして、さらに冥府の門から異形の怪物が出てき

た。その怪物は頭の部分に人間の顔があるが、他の部分は触手のようなもので出来ていて、さらに普通

の人間よりずっと巨大だった。そして一樹はその怪物のほうへふらふらと歩いていった。「そっちへ行く

な！」スネークは怒鳴ったが、一樹は聞く耳も持たないようだった。と、その時、いきなり一樹が吹っ飛

んだ。と同時に「早く逃げて！これ以上私が持たない！」と言いな
がら、一人の女性が現れた。

その女性はなぜか握った右腕を左腕で握り締めていた。と、女性が
力尽きたかのように倒れた。

と、さらに二人組みの男も現れた。「柳子・・・じゃねえよな・・・
どうなってんだよ！」

片方の男がそうわめいていた。さらに、もう片方の男は、「見える
見えるよ・・・」などと言いな

ら、怪物のほうへと歩み寄っていった。「早くそいつから離れろ！」
スネークはその男に言った。

と、さらに「だめ！シュウ！見ちゃだめー！！」と叫びながら、ま
たひとり女性が現れた。

しかし、そのところにはさっきの男は断末魔の叫び声を上げながら怪
物に取り込まれてしまった。

と、怪物が突然蒸気のようなものを発し始めた。そして、蒸気に包
まれた怪物の体から白い芋虫のような

物が這い出てきた。「逃げろ！逃げるんだ！」スネークはその物体
が危険な者であることを本能的に

さっし、大声を張り上げた。すると、さっきの男と女性が慌てて逃げ出した。そして、一樹ともう一人の

女性もすぐに後を追った。そして最後にスネークが、彼らのあとを追った。そして、彼の後ろを大量の白

い物体が追っていった。

冥府 6:00:00(後書き)

ご意見感想お待ちしております。

終了条件 夜見島遊園からの脱出

スネークは一刻も早く「冥府の門」から脱出するために、階段をひたすら上っていった。

すぐ後ろには例の白い物体が追いかけてくるため足を止めることはできなかった。と、前方から黒いもや

が迫ってきた。(なんだあれは?) スネークは疑問に思った。と、その時無線がかかってきた。

かかってきた無線の周波数に見覚えはなかったが、スネークは一応無線に出た。「スネーク! ああ黒いも

やは危険だ! すぐに排除するんだ。」無線の相手はいきなりそんなことを話し始めた。

「あんたは誰だ?」スネークは相手に問うた。「君のファンの一人だ。デイ・プ・スロートとでも

名乗っておこう。」「わかった。」スネークは通信を切った。スネークは男の言うことを信じることにし

た。そして黒いもやに向けて六四式小銃を構え、トリガーを引いた。そして、黒いもやを何体か倒した。

だが、最後の一体を倒そうとしたところで、今まで銃声を発してきた小銃が力チツカチツと言う音

という音しか発しなくなった。弾切れだ。スネークはとっさにリロードしようとしたが、黒いもやは

スネークの眼前に迫っていた。しかも、後方には白い物体もいた。と、黒いもやが飛び掛ってきた。

思わずスネークはしゃがんだが、黒いもやはなぜかスネークではなく白い物体に襲い掛かった。

これ幸いとはかりにスネークはいそいで階段を上っていった。

そしてついに「冥府の門」から脱出した。そして、急いで現場から離れようとした。

と、いきなり前方から自衛官が飛び出してきた。と、後ろにも自衛官が現れた。

スネークは自衛官に囲まれた。と（困ったことになった。）とスネークは思った。一人を銃で倒しても

もう一人に撃たれるだろう。かといってCQCを使うには距離が遠すぎる。

スネークは一か八かローリングで相手を倒し突破しようとした。と、いきなり片方の自衛官に黒い布に包

まれたなにかが襲い掛かった。そしてすぐにもう一人にもその物体が襲い掛かった。よく見るとそれはさ

きほどの白い物体が黒い布を巻いたものようだった。スネークは

この隙に出口へと走り出した。

そしてついに出口に到達した。しかし出口のさきの広場でさっきの黒い物体に包囲された。

戦闘は避けられそうではなかった。

その時、空から光が降り注いだ。すると、スネークを包囲していた物体が光を受けてその体

を燃やし始めた。そしてすべての物体が倒れ伏した。それを不思議に思いつつスネークは遊園地から

脱出した。

終了条件 夜見島遊園からの脱出（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

終了条件 自衛官の尋問

あれから数十分後、スネークはさきほどの遊園地から十分に離れた場所にいた。

ここならもうあの物体も追ってこないだろう。と、スネークは急に空腹感を覚えた。

空腹感を覚えると言うことは体力が減っている証拠である。スネークは携帯糧食^{レーション}を取り出

した。しかし、ここにも自衛官がいるかもしれない。どこか安全に食事を取れるところを探していた

スネークは一隻のフェリーを発見した。ここなら安全に食事ができると思ったスネークは

フェリーの出入り口を探した。すると、船体に穴が開いていたのでスネークはそこから船内に

進入した。しばらく船内を進むと、やがて船客用の部屋があるエリアにたどり着いた。

ここなら狙撃の心配はないだろう。そう考えたスネークはさっそく食事に取り掛かった。

そして食事が終わり、包みを片付けているとき、廊下から足音が聞こえてきた。

廊下を見ると、二人の自衛官がこちらに向かっているのが見えた。

そのうちの一人は六四式小銃の狙撃銃タイプを所持していた。そしてもう一人はAR-18に似た

小銃を所持していた。たぶん自衛隊の試作品の小銃だろう。

「三佐・・・自分不安になってきました。ほんとこれは夢なんじゃないかって。

自分の頭がおかしくなったのかって。」

「頭に弾丸ぶちこんでみるか？夢なら暖かい布団で目が覚める。夢じゃなかったら・・・それで

おわり。」二人はそんなことをいいながら廊下を歩いていた。幸い二人は部屋の中をのぞいたりしな

ったのでスネークがいることには気づかなかったようだ。

そうこうしているうちに二人は廊下の突き当たりまできた。

「俺はそこらを探索してくるからお前はここで待っている。」三佐と呼ばれた狙撃銃を持った男はそう言

うと、どこかへ歩き去ってしまった。今いるのは小銃を持った自衛官だけだ。しかもこちらには気づいて

いない。（尋問のチャンスだ。）スネークはそんなことを思った。そして、早速行動を起こした。

スネークは右手に自動拳銃を持ち、左手にスタンロッドを持って自衛官のそばまで足音を立てないように

近づいた。そして、すばやく自衛官を拘束した。「なぜ俺を襲った？目的はなんだ？」

スネークはスタンロッドを突きつけながら尋ねた。「な、何のことだ？」自衛官はそう言った。

「とばけるな！いいか、もう一度だけ聞くぞ。お前達の目的は・・・」さらに尋問しようとした

スネークの後頭部に、硬い質感のものが押し付けられた。スネークは後ろを振り返った。

すると、そこにはさきほどの三佐と呼ばれた男が立っていた。スネークに銃口を突きつけて。

終了条件 自衛官の尋問（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

終了条件 自衛官から逃走

「そいつを離せ。」三佐はそう言った。スネークは言われた通り自衛官を解放した。「武器を捨てて

両手を挙げる。」スネークは武器をすべて床に置き、両手を挙げた。

「お前はだれだ？」すると、三佐はこんなことを聞いてきた。「あんたらのほうが知っていると思う」

が？」スネークはそういった。しかし、相手は「いいや、お前とは初対面だ。」と言ってきた。

「そんなはずはないだろう？今朝もあんたらの仲間が俺を襲ってきたぞ。」

スネークは語気を強めて言った。すると、三佐は「お前は勘違いしている。あいつらは俺達とは違う。」

と言った。「なにが違うんだ？」スネークは三佐に尋ねた。スネークは所属している派閥などが違うのか

と思っていた。しかし、三佐からは予想外の答えが返ってきた。

「あいつらは人間じゃない。「化け物」だ。」「化け物？」「そうだ、化け物だ。」「三佐はそう言った。

「ふざけるな、人をおちよくるのもいい加減にしろ！」「そうか、なら証拠を見せてやる。」

三佐はそう言つと、部屋を出て行つた。しばらくすると、部屋の外から銃声が聞こえた。

そして、三佐が何かを引きずつて戻つてきた。「こいつから目を離さないで置け。」

三佐はそう言つて、引きずっていた物を降ろした。それは、人間の死体だつた。

その死体は眉間を打ち抜かれていた。多分三佐がやった物だろう。

その死体は格好から見るに民間人だろう。「なぜこんなことを・・・

」

スネークはそう言いかけたが、次の瞬間自分の目を疑つた。目の前の死体が眉間を撃ち抜かれているにも

かわらず動き始めたのだ。その死体は立ち上がると、スネークたちを襲い掛かつてきた。

しかし、死体がスネークに掴みかかる直前、三佐の狙撃銃が火を噴き、死体は胸を撃たれて倒れた。

「これでわかつただろう？あいつらは人間じゃない。化け物なんだ。」三佐はそう言つと、死体を

抱えて、船窓から放り出した。死体は下の地面に落下した。

眉間を撃ち抜かれて生命活動を維持できる生き物などいないはずだ。

しかし、さっきの死体は

平然と生き返った。こんなことが起るはずがない。しかし、スネークは自分の目でそれを見てしまった。

しかし、スネークはすばやく思考を切り替えた。（今MSFの連中が俺を探しているに違いない。

考えるのは本部に帰ってからでもできる。今は一刻も早く部下と合流しなければ。）

スネークはそう思うと、目の前の自衛官を無力化するため、彼らの隙をうかがった。

すると、もう一人の若い自衛官が三佐に何か話しかけた。そしてしばらく二人は会話していたが、

やがて三佐はスネークから目をそらした。三佐が目をそらした時間は一瞬だったが、

スネークにはそれで十分だった。

三佐が目を離れた隙に、スネークは三佐の両腕を掴み、三佐を地面に叩きつけた。

そしてすばやくスタンロッドを拾い上げると、三佐に突き刺した。

150万ボルトの電流が三佐に流れ、三佐は気絶した。

そしてハンドガンを拾おうとしたところ、スネークの目の前に銃口

が突き出された。

「う、動くな。」声の主はもう一人の若い自衛官だった。

「手が震えているぞ。人に銃を向けるのは初めてか、新米？」スネークは相手を見て言っ

た。そしてすかさずハンドガンを拾うと、自衛官に向けた。「動くなど言ってるだろう！」

自衛官は語気を強めて言った。しかしスネークは相手の様子など気にも掛けずに言った。

「一つだけ言っておこう。お前に俺は殺せない！」「舐めるな！」二人は膠着状態に陥った。

その時、ふいに廊下から物音が聞こえた。そして、武器を持った男達が部屋に乱入してきた。

「ここは協力するしかないようだ。」スネークはそう言って襲い掛かってきた男達を次々に射殺した。

自衛官も男達を射殺していった。そしてすべての男が倒された。

「終わったな。」スネークはそう言つと、いきなり自衛官を地面に引き倒し、自衛官が倒れている隙に

残りの武器を回収し、部屋から逃げ出した。「待て。」さっきの自衛官が呼び止めたが、

スネークは自衛官に「また会おう!」と言い残し、逃走した。

終了条件 自衛官から逃走（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

終了条件 ダンボールの確保

無事に自衛官から逃げおおせたスネークは船内を探索していた。しかし、船内の廊下を歩いているときに

前方から銃を持った男が歩いているのが見えた。スネークはとりあえず手近な部屋に入ったが、男は

すべての部屋を一つ一つ搜索しているようだった。（戦闘は避けられないか・・・）

スネークはそう思った。しかし、その直後、スネークの視界にある物が映りこんだ。

それはスネークが愛してやまない物だった。

そしてついに男がスネークが居る部屋に着いた。男は部屋の中を見渡したが、そこにあつたのは、

一個のダンボール箱だけだった。男はその部屋にスネークの姿がないことを確認すると、

他の部屋を搜索しにいった。その数秒後、突如ダンボールが持ち上がった。

そして、ダンボールの中からスネークが現れた。「ダンボールがあつて助かった。やはりダンボールは

戦士の必需品だな」

スネークがそんなことを言っていると、無線がかかってきた。

無線の相手は数だった。「なあスネーク。これから放すことを落ちて聞いて聞いてくれ」

カズはいきなりそんなことを言った。「なんだカズ？早く言ってくれ」

スネークはそう催促した。

「実は・・・さっき夜見島に送った部隊から連絡が入ったんだが、あんたの姿が島全体を搜索しても

いつこうに見つからないんだ。いや、あんただけじゃない。あんたが乗っていたヘリも見つからないん

だ」「ちょっと待て、どういうことだ？」「俺に聞かれても困る。一番詳しいのはそこに居る

あんただと思うが」「いや俺もさっぱり訳が・・・」

そう言いかけてスネークはふと腕時計を見た。

そして次の瞬間、スネークは戦慄した。なぜなら腕時計の時刻はとつくに日が出ている時刻なのに

そとはいまだに闇に包まれているからだ。（ここは夜見島じゃない？）スネークはそんなことを

思った。しかし、島の形状などは夜見島そのものだつた。「・・・
いったい何が起こっているんだ？」

スネークは一人呟いた。その時、船内から声が聞こえた。「髪飾り
返してよ」

声の主はそんなことを言っていた。「下で声がした。ちょっと見て
くる」

スネークはそう言つと、一方的に無線を切り、船の下方へと下つて
いった。

終了条件 ダンボールの確保（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6806w/>

メタルギアサイレン

2011年11月20日13時56分発行